



天津航路

岩崎生

一、船出

「螢の光」につれて船は徐々に海壁を離れ始めた。一秒一分だん／＼見送りの人々から遠ざかる。赤黄のチーフは切れて海の中へ落ちて了ふ。(今は廢止になつてゐるが)之れで陸地との繋り完全には絶たれて了つた。かと思ふと、一沫の淋しさが胸の中を通り過ぎる。側で盛んに手やハンカチを振つて、名残を惜しんでゐる老若男女、皆んな顔には悲痛な閃きを、見逃さない。中には涙をボロ／＼と落してゐる若き女、目を眞赤にしてゐる老人、送る者送られる者、總て心の中は別れの涙で溢れてゐる。船は無神經に、速度を増して行く。もはや見送りの人々の顔は、分らない。唯白いハンカチの動搖だけが、太陽の光に照り映えてハッキリと浮んでゐる。船客も唯誰彼なく、當もなく手を振つて、去り行く神戸港へ別れの挨拶をしてゐる。(東洋平和建設の爲に、幾千万とも知れない將兵が、懐しい故國、親兄弟姉妹、妻、戀人の面影を胸に抱きつ内地の港を去る時の氣持は、層一層深刻であらうが)ヒョソトしたら、永遠にこれにて、異國で亡くなるかもしれない、と思ふと知らず識らずに、去り行く港を凝視せずに居られな

ら降り出したのか。しのつく様な雨が降つてゐる。寒くなつた故か船客は身を縮めて窮屈さうに寝てゐる。大陸へ！大陸へ！の聲は澎湃として日本全土を蔽ひ、出る船出る船皆すし詰の狀態だ。あんまりのんびり寝られないのだ。三等船客の悲哀を味ふ。翌日晝過ぎ門司着。三時間停船。この間はあまり早く過ぎて了つた。關門連絡船で下關に渡り自動車をついて下關を見物す。日本の地を踏めるのも今しばらくだと思ふと土に愛着を感じる。國木田獨步も病床で東京を戀ふあまり東京を去る日東京の土に接吻しなかつたのを恨むと云つて居たのを思ひ出す。午後三時出發、二人ばかり乗船に遅刻ランチに乗つて追つて来た。タラップを下して船へ上る。迷惑も甚しい。當人も冷汗をかいてゐる。壽命が二年ぐらひ縮んだであらう。映畫で惡好が迫る場面を見てゐる様であつた。船は夕陽を浴びて一路天津へ本土を離れて行く。船客は甲板に出て去り行く本土をあかすに眺め別てゐる。沈黙の中に人の心は千差萬別であらう。夕陽は落ちて視界はせばめられて行く。大海に浮く木片にも等しい小さい〇〇丸に數百名の生命は託されてゐるのだ。スクリユウは相變らず力強い聲を傳へてゐる。さうだ、このスクリユウこそ我々の生命を握つてゐるのだ。空模様は段々悪い。今にも雨が降つて來さうな今夜は玄海灘を通るのだ。昔から波高く鬼門とされてゐるのだ。始めての航海故にどうも心が落付かない。恐ろしい地獄へ落入りさうな感に慄まされる。靜かに目をつぶつて總てを運命に捧げる時心は自ら安心の境地になる。舷側へぶつかる波が無氣味な音を立てゐる。今寝てゐる平面は即ち海面と等しいのだ。船の壁は十程か二十程か知らねど、黒い海の水がのうち廻つてゐる。霧の夜らしい絶えずボーボーと汽笛を吹きながら進んでゐる。時々近所を航海してゐるのか遠方から消入りさうな汽笛が聴えて來る山彦の如くに。船は朝鮮半島に沿つて段々進んで行くらしい。夜は無氣味ながら、百四、五十人が雜魚寝してゐるから安心なものだ。玄海灘もまあ無事に過ぎて、明朝も相變らずの曇天で視野は極めてせまい。船の進む後から／＼湧き出て消え行く白い泡の氣勢がよい。時々飛魚が珍らしい。見渡す限り海、海、海、平

三、上陸

船は黃海へ行つてゐるらしい。海の水が泥茶色だ。成る程黄色い海とはよく云つたものだ。變な處で感心する。支那の船が三々伍々見えだして來た。船中には眞黒な頑強な船頭が乗つてゐる。人の顔を見てニヤ／＼笑つてゐる。氣味が悪いしかし始めて見る異國の姿は總て好奇心を喚ぶ。總てが泥色で塗られた大陸の姿は何とも云ひ様のない殺伐さを感ずる。華陸と海の境がハッキリしてゐない。華みtainなもの海岸に生えてゐる。そして何時の間にか少し泥地が水面に出て來る。その泥地が赤地に變つて陸になつてゐる。見渡す限り陸が續いてゐる。白河に入つたらしい。土色の水がネバ／＼と船にくっついて來る様だ。川の邊は家も庭も門も壁も土、土、土だ。人の子も土の中で生れた土の中で死んで行くのだらう。こんな様な土の中の生活が出来たらうかと大陸の生活への不安が猛然と起きて來る。(後で之れは相變である事を知つた)間も無く塘沽の棧橋へ船は着く。天津の玄關にしては見すばらしい。税關吏に荷物の検査をして貰ふ。赤い白磁で英語か何か知らねど頭文字を書いて呉れた引込し荷物は赤箱に頼んで上陸第一歩の仕事は大體完了した。不安な氣持はまだ念頭を去らなからうか。さうすれば私の全財産が異國の古道具屋へ投資されるだけだとも考へて見た。塘沽の驛迄苦力に荷物を運んで貰つたが異國で日本の貨幣が通用してゐるのを知つて皇國の姿を再認識する。驛で天津行の切符を買ふ頭等一箇上天津多少錢と云へばよい。兩塊一毛である。(元)塊一圓角二毛十錢)暮色蒼然として日暮れる夕方北支第一の經濟都市天津へ到着した一年半も前から希望してゐた土地へ漸く到着した時は一種の興奮を覺えた。途中の驛々には着剣した銃を手にする皇軍勇士の嚴然たる姿に接し、限りなき懐しさと感謝の祈りを捧げるのであつた内地人を見る喜びは異郷へ來て感ずる喜びの一つである。

四、生活

天津邦人經營の雄たる〇〇紗廠の生活が始まる。こゝは上田の如く乾燥してゐるので絶えずお茶がのみなく乾く。そしていくらか飲んでも喉が乾く。飲んで割に小便が出ない。汗となつて蒸發して了ふのだらう。工場内は男が女よりも絶對多數を占めてゐる。男工がリングの糸つなぎをしてゐるのは一寸内地から來る者には奇異に感ずる。工場内の珍らしい風景を一寸紹介して見よう。建築が二階建故エレグエーターがついてゐる。商車仕掛が見えてゐる。デパートの様な立派なものではないが。女工の服装が美しい。上衣は赤黒青白と、とり／＼は満腹節である。言葉が全然分らない。雀の鳴りと唐國人を古人が評したのも宜へなる哉。總場を通り荷造り場へ行く。荷造機が並んでゐる。入つたタンから急に仕事に精を出すのか威勢よく作業の聲が聞える。部屋を出るトタンに、又威勢が悪くなる。氣の精かも知れぬが彼等の心理の反面を現してゐる様だ内地人でも多かれ少なかれある事はあるが唯露骨に示さないだけだ。うが！自分の心中を見すかされた様だ。二、三十貫目とあるであらう原棉を易々とつかひて行くその力には驚かざるを得ない。盗人根性が昔から傳つてゐるのか知らねどよく物を盗むある種の人割合に多い様だ。棉、糸、襪糸を苦心して家へ持つて歸る。その持ち歸るには苦心が必要なのだ。毎日歸る時身體検査をやられるから。工場の中で小便はする、大便も時々はする。痰唾などは問題ではない。手鼻をかむ等。衛生思想は前途遠慮の感を深くする。それ故か夏は蠅が多い。一寸痰等落ちてゐると眞黒にたかつてゐる。時々線條機のスライバーの上にまとつてゐる間にトランプに迄運ばれ自動停止で機械がよく停止するとウソの様なる話。工場の中で盛にお茶を飲む。仕事の合間にソソビとお茶を飲んでゐる様は支那式の標本とも云ふべきか。阿々。土瓶と熱湯は彼等の生活には一時も離す事は出来ないらしい。お茶をのむ故か何時も床は水でぬれてゐる。歩いてゐると時々滑るので注意が必要だ。

その他色々珍奇な事があるかも知れないがあまりに見聞する時が少なかつた事を恨む。午後五時半會社のバスに乗つて住宅に歸る。その間二十分。白河に消えた道を土煙を上げながら――途中大道の上をソソノと豚が歩いてゐる。自動車が出来ればならぬ、悠久の大陸は動物植物が斯の様に。大も呑氣なものだ。一日中飯も食はずに寝てゐる。大陸は若人に悠久の精神を指示して呉れる。しかし之れはあまり有難くない。總てが眠つて了ふから。五、天津街の印象

國際都市だけであつて支那に居るにも不拘あらゆる人種が見物出來る。日獨伊英米露ITCあらゆる國の人々が雜然と住んでゐる。現在には日英佛伊租界がある。舊獨租界は特別一區となり、舊露租界は特別三區となつてゐる。六月十四日から英佛租界隔絶され毎日新聞の第一面を賑はしてゐる。今後上海鼓浪嶼租界をめぐつて問題は重大化してゐる。日本帝國は授將抗日國英國の態度を覺醒せん爲斷乎として敢行した租界隔絶の檢問検査が行はれてゐるとの新聞の報道を眺め、去りし昨年の六月の姿は即ち無氣味な沈黙の平和であることを思ひ出して感傷深いものがある。街頭の交通機關の主なるものは、膠皮(天津では人力車の事をかく呼ぶ。北京では洋車と呼ぶ)である。

二、航海

船は一路天津へ向け速度を早め出した。間斷なくスクリユウの響が船室へ傳つて來る。何とする事はないから、毛布にくるまつて低い天井を眺めながら、はかない空想に耽つた。二千五百噸の小さい天津航路の〇〇丸も、瀬戸内海故餘りゆれず心地よい。船側にある圓い窓に、次から次へ小鳥や白帆があらはれる。瀬戸内海は確かに海の公園だとの感を深くする。何時の間にか心よい眠りに誘はれて、目を覺ました時はもうあたりは眞黒な闇である。夕方か

ら降り出したのか。しのつく様な雨が降つてゐる。寒くなつた故か船客は身を縮めて窮屈さうに寝てゐる。大陸へ！大陸へ！の聲は澎湃として日本全土を蔽ひ、出る船出る船皆すし詰の狀態だ。あんまりのんびり寝られないのだ。三等船客の悲哀を味ふ。翌日晝過ぎ門司着。三時間停船。この間はあまり早く過ぎて了つた。關門連絡船で下關に渡り自動車をついて下關を見物す。日本の地を踏めるのも今しばらくだと思ふと土に愛着を感じる。國木田獨步も病床で東京を戀ふあまり東京を去る日東京の土に接吻しなかつたのを恨むと云つて居たのを思ひ出す。午後三時出發、二人ばかり乗船に遅刻ランチに乗つて追つて来た。タラップを下して船へ上る。迷惑も甚しい。當人も冷汗をかいてゐる。壽命が二年ぐらひ縮んだであらう。映畫で惡好が迫る場面を見てゐる様であつた。船は夕陽を浴びて一路天津へ本土を離れて行く。船客は甲板に出て去り行く本土をあかすに眺め別てゐる。沈黙の中に人の心は千差萬別であらう。夕陽は落ちて視界はせばめられて行く。大海に浮く木片にも等しい小さい〇〇丸に數百名の生命は託されてゐるのだ。スクリユウは相變らず力強い聲を傳へてゐる。さうだ、このスクリユウこそ我々の生命を握つてゐるのだ。空模様は段々悪い。今にも雨が降つて來さうな今夜は玄海灘を通るのだ。昔から波高く鬼門とされてゐるのだ。始めての航海故にどうも心が落付かない。恐ろしい地獄へ落入りさうな感に慄まされる。靜かに目をつぶつて總てを運命に捧げる時心は自ら安心の境地になる。舷側へぶつかる波が無氣味な音を立てゐる。今寝てゐる平面は即ち海面と等しいのだ。船の壁は十程か二十程か知らねど、黒い海の水がのうち廻つてゐる。霧の夜らしい絶えずボーボーと汽笛を吹きながら進んでゐる。時々近所を航海してゐるのか遠方から消入りさうな汽笛が聴えて來る山彦の如くに。船は朝鮮半島に沿つて段々進んで行くらしい。夜は無氣味ながら、百四、五十人が雜魚寝してゐるから安心なものだ。玄海灘もまあ無事に過ぎて、明朝も相變らずの曇天で視野は極めてせまい。船の進む後から／＼湧き出て消え行く白い泡の氣勢がよい。時々飛魚が珍らしい。見渡す限り海、海、海、平

船は黃海へ行つてゐるらしい。海の水が泥茶色だ。成る程黄色い海とはよく云つたものだ。變な處で感心する。支那の船が三々伍々見えだして來た。船中には眞黒な頑強な船頭が乗つてゐる。人の顔を見てニヤ／＼笑つてゐる。氣味が悪いしかし始めて見る異國の姿は總て好奇心を喚ぶ。總てが泥色で塗られた大陸の姿は何とも云ひ様のない殺伐さを感ずる。華陸と海の境がハッキリしてゐない。華みtainなもの海岸に生えてゐる。そして何時の間にか少し泥地が水面に出て來る。その泥地が赤地に變つて陸になつてゐる。見渡す限り陸が續いてゐる。白河に入つたらしい。土色の水がネバ／＼と船にくっついて來る様だ。川の邊は家も庭も門も壁も土、土、土だ。人の子も土の中で生れた土の中で死んで行くのだらう。こんな様な土の中の生活が出来たらうかと大陸の生活への不安が猛然と起きて來る。(後で之れは相變である事を知つた)間も無く塘沽の棧橋へ船は着く。天津の玄關にしては見すばらしい。税關吏に荷物の検査をして貰ふ。赤い白磁で英語か何か知らねど頭文字を書いて呉れた引込し荷物は赤箱に頼んで上陸第一歩の仕事は大體完了した。不安な氣持はまだ念頭を去らなからうか。さうすれば私の全財産が異國の古道具屋へ投資されるだけだとも考へて見た。塘沽の驛迄苦力に荷物を運んで貰つたが異國で日本の貨幣が通用してゐるのを知つて皇國の姿を再認識する。驛で天津行の切符を買ふ頭等一箇上天津多少錢と云へばよい。兩塊一毛である。(元)塊一圓角二毛十錢)暮色蒼然として日暮れる夕方北支第一の經濟都市天津へ到着した一年半も前から希望してゐた土地へ漸く到着した時は一種の興奮を覺えた。途中の驛々には着剣した銃を手にする皇軍勇士の嚴然たる姿に接し、限りなき懐しさと感謝の祈りを捧げるのであつた内地人を見る喜びは異郷へ來て感ずる喜びの一つである。

天津邦人經營の雄たる〇〇紗廠の生活が始まる。こゝは上田の如く乾燥してゐるので絶えずお茶がのみなく乾く。そしていくらか飲んでも喉が乾く。飲んで割に小便が出ない。汗となつて蒸發して了ふのだらう。工場内は男が女よりも絶對多數を占めてゐる。男工がリングの糸つなぎをしてゐるのは一寸内地から來る者には奇異に感ずる。工場内の珍らしい風景を一寸紹介して見よう。建築が二階建故エレグエーターがついてゐる。商車仕掛が見えてゐる。デパートの様な立派なものではないが。女工の服装が美しい。上衣は赤黒青白と、とり／＼は満腹節である。言葉が全然分らない。雀の鳴りと唐國人を古人が評したのも宜へなる哉。總場を通り荷造り場へ行く。荷造機が並んでゐる。入つたタンから急に仕事に精を出すのか威勢よく作業の聲が聞える。部屋を出るトタンに、又威勢が悪くなる。氣の精かも知れぬが彼等の心理の反面を現してゐる様だ内地人でも多かれ少なかれある事はあるが唯露骨に示さないだけだ。うが！自分の心中を見すかされた様だ。二、三十貫目とあるであらう原棉を易々とつかひて行くその力には驚かざるを得ない。盗人根性が昔から傳つてゐるのか知らねどよく物を盗むある種の人割合に多い様だ。棉、糸、襪糸を苦心して家へ持つて歸る。その持ち歸るには苦心が必要なのだ。毎日歸る時身體検査をやられるから。工場の中で小便はする、大便も時々はする。痰唾などは問題ではない。手鼻をかむ等。衛生思想は前途遠慮の感を深くする。それ故か夏は蠅が多い。一寸痰等落ちてゐると眞黒にたかつてゐる。時々線條機のスライバーの上にまとつてゐる間にトランプに迄運ばれ自動停止で機械がよく停止するとウソの様なる話。工場の中で盛にお茶を飲む。仕事の合間にソソビとお茶を飲んでゐる様は支那式の標本とも云ふべきか。阿々。土瓶と熱湯は彼等の生活には一時も離す事は出来ないらしい。お茶をのむ故か何時も床は水でぬれてゐる。歩いてゐると時々滑るので注意が必要だ。

その他色々珍奇な事があるかも知れないがあまりに見聞する時が少なかつた事を恨む。午後五時半會社のバスに乗つて住宅に歸る。その間二十分。白河に消えた道を土煙を上げながら――途中大道の上をソソノと豚が歩いてゐる。自動車が出来ればならぬ、悠久の大陸は動物植物が斯の様に。大も呑氣なものだ。一日中飯も食はずに寝てゐる。大陸は若人に悠久の精神を指示して呉れる。しかし之れはあまり有難くない。總てが眠つて了ふから。五、天津街の印象

國際都市だけであつて支那に居るにも不拘あらゆる人種が見物出來る。日獨伊英米露ITCあらゆる國の人々が雜然と住んでゐる。現在には日英佛伊租界がある。舊獨租界は特別一區となり、舊露租界は特別三區となつてゐる。六月十四日から英佛租界隔絶され毎日新聞の第一面を賑はしてゐる。今後上海鼓浪嶼租界をめぐつて問題は重大化してゐる。日本帝國は授將抗日國英國の態度を覺醒せん爲斷乎として敢行した租界隔絶の檢問検査が行はれてゐるとの新聞の報道を眺め、去りし昨年の六月の姿は即ち無氣味な沈黙の平和であることを思ひ出して感傷深いものがある。街頭の交通機關の主なるものは、膠皮(天津では人力車の事をかく呼ぶ。北京では洋車と呼ぶ)である。

〔要目〕 ○緒論 ○製絲原料 ○繭の保全法 ○製絲用水 ○煮繭 ○練絲 ○生絲整理 ○生絲檢查 ○屑繭整理法 ○生絲貿易

東京市神田區錦町一
振替東京一三二九〇

明文堂

圖書目錄

古平庄衛

吾々裴絲科の學生は學課目中數學の時間最も多く、且先生の御講義明確にして未だ不踏の高等數學の難境に吾々をぐんぐんと奥深く、踏み入らせて下さつたと同時に先生の印象が一層濃く我々の腦裏に刻み込まれていつたのは當然である。

それは確か入學の一學期の末であつた英語の試験の際、いよゝ問題にぶつかると、案に相違して教科書よりは出題されず、日本語化した新英語單語が四十題ばかりすらりと容容を誇つてゐたので吾々一同 周章狼狽問題をにらんで一時間待期の後、次の時間が數學だつたので語學擔當外の先生に其の解答をお尋ねした處、直に實に詳細に御説明して下さいたしかも其の單語は時事經濟に關する新語該博なる御智識に驚嘆したのであつた。

この様に先生には該博なる御智識と澄

拜啓 時下益々御清穆之段奉恭賀候

諸て内田先生には御承知の如く大正十二年十二月四日校御就任以來實
 に十有五年の久しきに亘り母校の教官として或は又校友會部長として
 全力を傾けて御盡瘁下されば母校のため貢獻せられしこそ眞に大なる
 もの有之吾々會員一同感謝に不堪所に御座候
 然るに此の度七高工増設さるゝや招かれて多賀高等商業學校機械課
 長に御榮轉せられ既に新任地へ御赴任被遊候
 就ては此の際先生の御功績を讃へ且多年の勞に報いん爲資金を募集
 し記念品を贈呈し聊か感謝の微意を捧げ度候間左記要項御諒承相成
 御賀同の上御醸金被成下度此段御依頼旁々得貴意候

敬具

申 酌 出 金 額 御 隨 意
期 良 召 和 十 四 年 上

一、受領證
記念品選定及贈呈方法は發起人に御一任相成度

川上 田五郎男
倉原 荻原
美清 徳治
峯原

追て既に申込みたる者は左記の通り_{（但し校内千曲會員は既に此外に別に記念品代を出資致しをり候間此點御含みの上御參考被下度候）}に付御參考迄に申添候

小松 忠幸	近藤 正治	須田 豊二	野口 誠一	千葉 達人
茅野 功	手島 孝一	西原 美登	野口 新太郎	林 貞彦
松浦 彰義	山田 良人	山崎 保太	山崎 常録	横内 豊彦
渡邊 綱男				
金參圓也	窪田 貞三	笠原 正巳		
金貳圓五拾錢也	潤 荻原 清治			
金貳圓也	蒲生 俊興	倉澤 美徳	須田 圭二	野口 新太郎
金壹圓也	小松 忠一郎	山口 定次郎	小林 尚一	湯原 諄
山田 良人	古平 庄衛	山崎 常録	町田 博	

れるが如き御熱心さとを以つて我々を御教授下さつたので、我々は三年の長期間心から信頼して師事する事が出来たのである。

三年の學堂生活を終り、私は横濱生絲検査所に奉職したが後病を得て、再び母校に御厄介になつた。

そして其後は、毎日先生と御顔を合せ種々御指導、御鞭撻を賜つたわけである。先生には私の如き敗殘者にも以前と少しも變らぬ御溫情を以つておつかへ下さい、且何れも分らぬ私を何處迄も御親切に御教導された一事は、私にとつては感銘銘におくたはず、永久に忘れ得ぬ事柄である。

山崎管錄

突如として我が恩師内田先生轉任の報に接した。尤も之は我々の大部分が既に其の事を知らる以前に於て、かゝる話があるとなつたが、それとは想像に及ばなかつた我々に於ては正に青天の霹靂である。母校に於て工學科目の御教授に盡瘁せらるゝ事既に十有餘星霜、孜々として我が學徒の御調育に精勵せられ其の趣きを見えなかつた師が、今こゝに我が校を去らうとは誰が豫想し得たであらう。心をくまきかの感に打たれざるを得ないであらう。それが實現したのである。實に云つても企ての實現は喜こびのそれ

青洋二破爲步大臺

上候
陳者私儀上田蠶絲專門學校在職
中は公私共一方ならぬ御厚誼を
賜り肝銘罷在候處今般新設の多
賀高等工業學校に轉任仕り候に
就ては此上共御指導御鞭撻の程
只管御願申上候
先は平略儀書中御挨拶申上度如
斯御座候
敬具
尚新校舎落成までは舊助川高等女
學校校舎(茨城縣多賀郡助川町)を
假校舎と致し來る七月十日開校の
豫定に御座候
昭和十四年六月

向暑之候愈々御

謹啓 向暑之候愈々御清稷の段
奉賀儀 長野縣下高井郡養蠶業
組合並に家事中は種々御指
導御交誼に預り厚く御禮申上候
長野縣釐金課長
野縣經濟部上田支所兼長
野縣に相成候ては今後共一層
の御指導御鞭撻の榮を賜り度く
願上候
先は御略儀に紙上御挨拶申上度
如斯御實候 敬具

濱村一彦

時局愈々多難之

樣益々御健勝之趣奉大賀候
 陳者私儀今回御蔭様にて本校副
 手を拜命物理實驗室に勤務致す
 事相成候間何卒今後共倍舊御指
 導御鞭撻賜度伏而奉懇願候
 先は乍略儀以紙上御挨拶申述べ
 如斯御座候
 昭和十四年七月一日
 敬具
 物理學教室 山田 培夫

川瀬教授退官

元母教授であつて最近迄東京帝國大學農學部教授の要職にあつた農學博士川瀬勲三郎先生は、御病氣療養中の處に復讐せられ、遂に四月十三日退官せられた。上田蠶絲專門學校から東京農學部を通じて在職廿有餘年間、教育界及農藝化學界に貢献された業績は已に周知の事である。非常時局下の産業界、教育界及學界にとつては國家的の一大損失と云はねばならない。

一、履歴及性格

先生は徳島縣板野郡松島村の御出身で明治十九年生れの本年五十四才である。明治廿七年三月東京私立商工中學校卒業、四十年七月第一高等學校二部乙類卒業、四十三年七月東京農學部農藝化學科卒業、四十四年七月東京農學部農藝化學科卒業、同年十二月大學院を退學して東京農學部農學部附屬農藝化學研究所講師となり、四十五年四月全校教授、大正八年九月農學博士の學位授與、大正九年十月有機化學研究のため歐米出張を命ぜられ、大正十年三月渡歐して大正十二年九月歸朝、大正十三年七月東京帝國大學教授を兼任、大正十五年八月上田蠶絲專門學校教授を被免、東京帝國大學教授に専任せられ今日に至るものである。

筆者は残念の事に先生の御口邊に親しく接する事は出来なかつた。以下は先生と同僚であつた古谷教授の話を基として、先生を記してその背の風を偲ぶこととする。

日頃肥満の體軀をもたれ謹嚴な性格の持主であつた。何等趣味とてなく精々讀書位であつた。御健康の時分は並ならぬ頭腦明晰の方で、其の記憶力の宜き加減は日常の起居動作にもよくあらはれて、右に出るものはないと云はれて居る。殊に語學に堪能にして常に座右に「万葉」なるものを置き、一章なり一冊なりを讀破して後には自らの胸中に該要を成文して控へて置いた由である。而も精力旺盛にして如何なる書物も必らず一晝夜位で讀み終へ、睡り度い時に睡り、働き度い時に働くと云つた風であつた。又、「大なる心身の活動力は清澄の朝にあり」と云ふて好んで朝起をせられた様事共は何れも偉大な自然科學者によく見受け

られる性格その儘の様であつた。先生の御病氣は特殊な神經衰弱(時に興奮性であり時に沈滞性である)であつて、歸朝直後から其徴候があつた由で過度の勉強が原因となつたと云はれて居る。大學教授任後、時折發病せられて困難を感じ、最近には順に其程度を重なり、職にも堪へず御療養のためやむなく御退官されたのであつて、それに最近の奥様に御不快の御様子で、誠に先生の前半生は實に輝かしいものであつたが後半は御氣の毒に堪へない事のみ繼續であるとも云へるのである。

二、退職記念資金募集

先生は日頃學界並に教育界の事に専念致し余財等も更になく、御病氣の方も全快に至らず、その御療養のための出費等も尠くない様にて、御退職の上は更に御困窮の事とお聞きして居る。それで東京農學部内その他の有志の方々に、それで先生御退職記念のため、且つは御療養のための資金募集が計畫せられて最近左記要項にて各關係方面へ依頼が發せられたところである。會員諸氏中にも心當りの方もあらうと思つて御案内申上げる次第である。

募集要項

- 一、名 稱 川瀬教授退職記念
- 一、募 金 額 隨意
- 一、募金締切月日 昭和十四年七月卅一日
- 一、事 務 所 東京市本郷區向ヶ岡彌生町、東京帝國大學農學部農藝化學教室内
- 一、發起人有志 色川三男 井上柳梧 藪田貞次郎 小田義男 兒玉章 平塚英吉 關根秀三郎 鈴木文助

川瀬勲三郎博士の御退官を惜しむ

須田圭二

恩師、川瀬先生は明治十九年三月廿日徳島縣板野郡松島村大字引野四番地に生れ、一高を経て明治四十年九月東京帝國農學部農藝科に入學、優秀の成績を以て全四十三年七月全科を卒業後大學院に

入り次で、東京帝國農學部附屬農藝養成所講師を嘱託せられたが、明治四十四年三月廿一日、上田蠶絲專門學校講師を嘱託、翌年四月廿三日教授に昇進した。大正八年九月三日蠶絲博士の學位授與に關する論文通過し農學博士の學位を授與せられ、大正九年十月廿日、有機化學研究の爲め滿洲國へ追加、大正十二年九月十一日歸朝せられ而して大正十四年、東京帝國農學部教授に榮轉した。

先生は御病氣の故を以て去る四月十三日、敍從三位、勳二等、本俸五級俸を賜り願により本官を免ぜられたので甚だ失禮乍ら以下少しく在りし日の事共を記して見た。

先生は大學教授の榮譽にはなされたが東京へ御赴任以來兎角御病身であつた爲に經濟的に誠に恵まれなかつた。長年の御病氣であつた爲め其間に消費された額は頗る多かつた事と恐察なさるべく、今後御退官により一日も早く先生の御健康回復をお祈りす次第である。

筆者が本校助手となり工業化學教室勤務を命ぜられたのは大正六年の十月廿日であつた。先生にはその頃蠶絲の研究を盛んに行つて居られたが、間もなく民間から研究費を得て蠶絲の工業的研究をし、他方、桑の炭水化合物に關する研究を續けて居られたが桑の摘み、夕摘の研究も續いて爲された。處が夕摘も摘み桑葉成分にはたいした差異が無いと云ふ試驗成績も他に發表されたので先生と一緒に朝の四時から夜の十二時頃まで學校に居つて桑の炭水化合物の含量の變化を調査した事もあつた。尙ほ朝摘夕摘の飼育試験もなし、摘桑給與の優秀なる成績を春秋二回の飼育試験の結果實證する事を得た。

大正十年、先生が海外に御出發の前、二年は特に御多忙の様に見えた。蠶の血液や酵素の研究も洋行前に片附けられたが土壤學や肥料學も御洋行前に發行された。その頃の先生の勉強振りはたいしたもの、毎日朝から晩まで讀む事と書く事以外には餘念がなかつたであらう。偶々所用があつて夕方などに先生を訪問した時にもう既に宿の二階で寝て居られた事もあつたが而して夜中には起きて勉強されたものらしい。平常「夏は朝早く起きて勉強するに限る」と言はれて居つた時々東京などへ御出張の時に行きと歸りは必ず一冊宛の書物を車中で讀まれた。

たさうだ。先生は非常に記憶のよい方で十年位前の事なら大體覚えて居られるので驚入つたが過度の勉強の害は御洋行前に已に健忘症に陥られ、毎日使つて居る私共助手の名前までも度々忘れてしまひあの人? あの方? の連發で容易に名前が出て來なかつた事もあつた。在外中これ亦一生懸命勉強されたさうだ。大正十二年に歸朝せられた時は折悪しく關東大震災に遭ひ航海中、無電でその事を知らず横濱へは上陸出來ず静岡縣清水港へ上陸した。さきに日本へ送つて置いた先生の荷物は横濱の倉庫に到着して居た爲にすつかり焼かれてしまつた。鳥有に歸した荷物は三千圓程度のものではなかつたが、その中には定めし尊い海外に於ける研究成績や、日本では求め難い出来ぬ得難い品物も澤山にあつた事と想ひ誠に御氣の毒にたえなかつた。歸朝されてからは一度に勞れが出たと見えて身休に不足を感ぜられたので、何れも何れも不足を感ぜられたので、毎日學校へ來ても盡休に散歩をする様になり、筆者も一緒に常田池や國分寺藥師などへお伴をした事もあつた。

あちから歸つて來られてから日本の町や家が非常に穢く感ぜられた様になつたさうだ。學校へ來ては置棚の上や机の上に塵埃のあるが馬鹿に目につき、机の抽斗の中などに種々雑多のものが雜然とはいつて居るの如何にも氣にかゝる様になり、毎日大整理を始めた。大學へ行つてもその通りであつたさうだ。宿へ歸つてもまた飯をたべた同じ座敷へ蒲團を敷いて寝る事が非常に穢く感ぜられた。果ては日光があつたてと戸の隙間から塵埃のパーチクルが空中に浮んで見える事がある。それ迄が穢に障る様になつたさうだが抑もそれは皆御病氣の精であつたと思はれる。而して先生の御病氣は過勞の爲であるから充分静養しなへすれば、必ず全快するものと信じて疑はない。

先生とお別れしてからは餘りお目にかかる機會もなかつたが、親しくお厄介になつたのは昭和五年の暮から昭和六年の正月にかけて一週間許り東京へ出張した時であつた。實は暮の内に仕事を片附ける豫定であつたが年末、年首の御多忙の折柄先生には御來客が多かつた爲に遂に仕事はお正月に持ち越し先生の自宅に年越しをし、たいへん御世話になつてしまつた。その頃は先生も大體御病氣は直つ

た時であつたが而して大分御病氣は進ばされて居られた。昭和七年の四月には再び上京して未發表の論文の整理を爲したが、残念な事發表する域に達しなかつた。而してその前、お伺ひした時よりさうと御史夫になられた様に見受けられた。それからその次の年のお正月であつたが、再三品川の御殿山なる御宅へお伺ひした事があつたが先生は御病氣で大分變つて居られた。恰度御令關様も御病氣で國の方へ歸られて居つた時で「自分が病氣なものでから妻までが神經衰弱になつてしまつた」とこぼして居られた。

東京へ行かれてからは先生は御病氣の爲め晴々とした氣持の時も定めし少なかつたろうと恐察する。毎年賀狀は頂戴したが「宿病未だ癒えず御無沙汰致居候段御海容被下度候、折角治療中に付年餘事御安心被下度候」とか「宿病癒えず能率不良にて閉口候」などの文句が時々御書面の中に認められてあつた。

上田の學校に居られた時は毎年三回位論文を書かれて居つたが大學へ御榮轉せられてからは餘り論文の發表は無かつた。實に名文であるのに氣がつく。先生の論文を全部讀破すれば自ら蠶桑化學の全般がうかがはれる事と思ふ。

農業藥品 化粧品 純良藥品 寫眞材料
三共農業藥品ウズブルン
東信代理店
上田市海野町
合資會社 河合商會
電話 二七(海野町營業所)
電話 八一五

化學藥品 上田市原町
化學染料 山崎山林堂
電話 四一三
農業藥品 電話 九一三

Westminster Abbey

第一回鐵道工業聯合會議演會に三氏出席
大日本紡物協會主催の第一回鐵道工業聯合會議演會は六月十日午前九時より東京丸の内帝國鐵道協會二階大講堂に於て開演されたが、當日は初夏の香りも豊かななか快晴目のこゝとて早朝より學界、業界の諸名士を始め熱心な聴衆が詰めかけ定刻に立錫の餘地なき盛況であつた。母校校長に井上校長、奥教授及小松助教の三氏が出席された。殊に井上校長には農林省蠶絲試験場の森博士と共に蠶絲學會を代表して講演せられた。因にその演題學會は次の如くであつた。

上田蠶絲專門學校長 井上 柳樞
定刻先づ理事長西田博太郎氏が大日本
織物協會總裁伯爵金子賢太郎氏開會挨拶

織の友成博士の「ス・フの品質向上に就て」井上校長の「品質變換に關する研究」

金子伯にも偶々十一時頃御老體を提げて出席せられ、永年見た歌米産業界を此

文部省に於て企畫院、對滿事務局、興亞院、陸軍省、海軍省、拓務省等と連絡し滿洲國政府、北支派遣軍の協力を得て學

學生隊の滿洲班に行元生徒主事以下學生一〇名、北支蒙疆班に小山教練囑託外學生一〇名を參加せしむる。詳細は次號。

して六月十一日東京の國民体育館に於て行はれた第十二回全國學生劍道聯盟優勝大會に出場(志賀師範引辛)した。参加校

以來母校養蠶生理實驗室に副手として、養蠶實務を掌る關博士(蠶二三)は六月十三日付兼講師を命ぜられ、養蠶實習、蠶體生理實驗、蠶體生理學の一部を擔當されることとなつた。

國青年隊の長野中隊（中隊長は舊職員石井清司中尉）の一員として上田市聯合青年團を代表して參加、六月二十一日より

勤勞地は滿洲國牡丹江省密山縣第五次移民信濃村で、此所で充分勤勞奉仕と現地視察をなし九月二十日頃現地を出發、末

斑病て上田病院に入院加療中であつたが、
藥石効なく六月十六日午後一時遂に永眠
され、十八日午後三時新田の御自宅に於

絲科副手として窪田助教の研究の助手として勤務して來た矢島文雄氏(絲二〇)は今回日本高周波重工業株式會社に勤務

東京高蠶生來訪 東京高等蠶絲學校養蠶科二年生三十五名は木暮教授に引卒され長野縣の養蠶關係視察の途次、六月二

には井上校長始め遠藤課長、佐藤科長外養蠶關係の先生が出席された。

一年生臨時試驗 各科一年生は一學期に於て修學した各學課の臨時試驗を六月十九日より二十六日迄行つた。

校庭、室内等の清掃、排水路、土堤工事、機織の手入等各科立案に基いて行はれたが、本年第二回

體操を終つて朝食、八時十五分出發して作
業場到着九時、九時廿分營林署員指導
の下に作業開始、晝食休憩一時間半、作
業終了四時、宿所到着五時、入浴、夕

林の岩巖さを味ひ清澄な空氣に薫り
分な身心の鍛練が出来た。

主事 冠安生後主事 小山曉
託、古平講師、山田講師、西入
履、計七十五名

主事、小松助教、志賀生徒主
事、小山囑託、湯原講師、町
田講師、武井副手、計七十八名

二十日授業を終へ、二十一日より四日間
集團勤務をなし、十月一日より夫々各地
の紡績會社に校外實習に赴いた。

勤勞報國隊員となり滿州、北支及蒙疆に派遣される筈である。

全收繭量は四三七、四五二瓦で其の中で上繭は四〇四、一五二瓦で、掃立蛾量は一〇瓦、一瓦當りの収繭量は一貫六十一匁

二十四日採種室の消毒から開始された。大體七月十日頃までかゝる豫定で、採種

十五日養蠶實習を終り、三十五日間の校外實習に入つた。實習先は別記の如く、各府縣蠶業試驗場及蠶種會社等である。

糸一年の見學 糸一年は六月二十六日
山田講師に引卒さし篠の井蘭檢定所、更
級蘭絲及び市内の信濃蘭絲を見學し檢定
所に於ては蘭檢定に關する講話を拜聽し
た。

軍工廠造機部に勤務せられる事となり、六月二十七日付退職せられ赴任された、益々御發展あらん事を願ふ次第である。

學に出發した。八時半長野着、九時より
農事試験場、長野放送局、長野測候所、
職業試験場等を見學し午後二時五十分長

試驗場松本支場、片倉普及團、同製絲場、同蠶業試驗所、縣蠶業試驗場松本支場、同取締支所等を見學、翌三十日は有明村

故谷島中佐の遺骨を迎ふ 一時母校配屬將校を兼ねられ、上田中學校配屬將校であつた谷島琢也歩兵中佐には一昨年應

て無言の歡旋をされた。諸團體、市民多數と共に母校職員多數も之を出迎え弔意を表した。

一、五瓦宛て、擔任指導者は佐藤春太郎
二、三月に濱手、三月に據立てて、各人蠟量
三、四月に濱手、四月に據立てて、各人蠟量
四、五月に濱手、五月に據立てて、各人蠟量
五、六月に濱手、六月に據立てて、各人蠟量
六、七月に濱手、七月に據立てて、各人蠟量
七、八月に濱手、八月に據立てて、各人蠟量
八、九月に濱手、九月に據立てて、各人蠟量
九、十月に濱手、十月に據立てて、各人蠟量
十、十一月に濱手、十一月に據立てて、各人蠟量
十一、十二月に濱手、十二月に據立てて、各人蠟量

は別個に職員、傭人、休暇中の通學生は七、八月の各一、十五日校内に於て勤務作業を行ふこととなり、其第一回の七月

現地慰問談を聴く 七月一日午前十時より一時間半、舊講堂に於て過般郷軍代表の一人として北支方面戦線の勇士慰問

部長更迭に伴ひ同部特別委員の改任が行はれ窪田潤、小松忠一郎兩氏が辭任、新たに小林敏、山田良人、市村尚文の三氏が任命された。

六月二日 學校宛電信
無事航海中、遙かに皆様
の御健

自宅宛通信の中より

ひだつた。食堂に來ぬ船客も少なくなかつた。

第三目 着物の整理、着換え、

子供のものごとの様。
第四目 挨拶状二六〇枚書いて

六月末頃にはニューヨークへ行く、紐育には十月末まで居る豫定。

名、三等百四十二名。
一等船客には日本人二十名丈しか
ゐない。他は皆西洋人、而かも船

むる爲舟賃半額で募集した客が多
い由。

日本人は海外支店に轉任する者三

役小杉方也氏、原合名會社紐育支店長吉本周之助氏、ドクトル原瀬施三郎氏、小説家中里介山氏。

上海だより

MK 生

松村秀美氏（蠶一、現農林省蠶絲試驗場技師）には支那に於ける蠶品種並に繭の調査研究と云ふ重大なる官命を帶び、五月二十日午後二時同餐飯島、久保田兩氏外多數の出迎を受け、日華連絡船長崎丸で當地に安着せられた。同氏は平素の溫順に懷し味ある微笑を湛へ、頗る元氣で例の諸講を連發され、餘給紳々たる言動は同窓の先輩として心強い限りであつた。松村氏は上海の滞在も兩三日で華



晚餐會を六月六日午後六時から當地第一流の料亭たる江灣路六三園で催したのである。當地で同窓の會合は嚆矢で出席率百%と云ふも珍しきことと思ふ。まあ上海千曲會の序曲と申してもよからう。これも今回の事變の産んだ賜である。何れ井上校長の御渡支を俟ち發會しやうと申合せた。參會せるものは、主賓松村氏の外海澤萬次郎（絳七、三菱商事會社上海支店勤務）、久保田昌人（蠶七、華中蠶絲株式會社勤務）、吉開亮一（絳七、華中蠶絲株式會社勤務）、關口三郎（絳七選、第一相互生命保險株式會社勤務）、飯島貞雄（紡一、東亞製麻株式會社勤務）、山手信男（紡一、上海江海關勤務）の七氏である。何れも一騎當千の士で何れも大陸に深き理解を持ち活動して居るのは會心の至りである。宴進むに隨ひ、松村氏を始め諸兄何れも上田學憲時代を偲び談論風發の後伊那節まで口吟み心行く迄痛飲したことは忘るゝことの出来ぬ情景であつた。未曾有の事變下に於て經濟戰士として奮闘しつゝある吾等の慰安には相應であるとの一つであつた。支那大陸に於ける經濟建設も着々進捗しつゝある際、今後日滿支經濟の中心たる上海並に中支に對し我同窓の認識を得て戴き度いと念願する。我同窓の滿洲に於ける飛躍も頗る結構だが、中南支にも大いに雄飛する様工作することゝ母校職員並に千曲會幹部各位の急務とと考へられる。敢て松村氏の渡支の機に上海だよりをした次第である。因みに同氏は去る十日に鯉澤、青島に向はれ北支、滿洲を經由歸朝せらるゝ筈である。（六月十八日稿）

今回吾々みずい會員中最先輩で在られた岡豊治郎氏は、多數の毛織物監督員中より大拔擢され、多數の毛織物監督員より樞要な地位に大榮轉する事になりました。岡氏の爲誠に慶賀に堪へません。益々將來の御活躍、御發展を期待して居ります。去る十七日一宮市敷島食堂に於て心許りの歡送の宴を張りました。尙本席へ元上田染織試験場に居られた時岡技手氏が懇々御出席下さいました。御厚意に對しては深く感謝致します。(昭和十四年六月末)

因に岡豊治郎氏は仲々の風流とも聞いて居る。編輯子が最近岡氏から戴いた手紙の中で報告せられた一句を紹介して人

赤尾文顯氏より

初更の候と成りましたが其後校長先生には御障りも無く御健勝の御事と存じ上げます。爾來、何かと取紛れ乍不本意御無音に打過ぎ誠に申譯次第も御座居まさん、不惡御容赦下さい。降而小生事昨午○月應召以來、滿一ヶ月間補充充勤務を續けて居りましたが、御蔭様で次第務めて去る○月下旬、大命を拜し、勇躍して現地に參る事を得ました。目下至極丈夫にて日々元氣旺盛にて○○に於て○勤務に服して居ります。大陸に一步踏んで第一に先輩將兵の奮戦の跡を見てその功績を思ひ、その勞苦を推します。そして未だにやまぬ第一線の將兵の活躍、占領地域の警備の苦勞等、筆舌に盡きぬものがあります。然し一方、行届いた宜撫

(五月十二日) (校長宛)

時下新緑の候、益々御清祥の段、奉賀候。陳者其後御疎遠に打過さ、誠に申渡無之候。御蔭様を以て至極元氣にて、軍務に勵み居り候。爾來征途に立つて日夜待ち居り候處、今回大命を拜し、勇躍任地に到着致し候間、乍他事御休心被下度候。今茲に祖國遠く大庭に立つて其の大なるを病感致し居り、切に胸打つものは皆々様の熱誠歎溢る。御後援と御鞭撻に有之、唯々感謝の外なく、厚く御禮申上候。此の上は粉骨碎身以て盡忠報國の誠を致し、皇軍の使命を完ふし、誓つて皆々様方の御期待に添ひ度き覺悟に御座候へば何卒今後万事宜敷御願申上候。先は略儀にて任地到着の御挨拶を申上へ、遙か皆々様の御健康を祈り上候。(五月十六日)〔校長宛〕

今度私應召に際

先生の御芳情にほ全く御禮の申上様も、座居まはせ。謹んで厚く御禮の申上様に降つて私、去る〇日無事入隊今では元氣一特務兵としての教育訓練を變化に居ります。最初は余りの境遇の變化に全く面喰ひしも、又感慨無量のものもありました。近い今では〇やう馴れて参りました。明日十一日が最後の許された面會日です。明日の生別が死別となるかも知れません。入隊するときから充分覺悟して来て居ります。それから早く現地に行き度い氣持で一杯貴狀の視察の出望だつた。此の視察より得た幾多の參考を再び社會に歸つて活用する機會はなくなるかも知れませんが、とにかく満支の實際を見物する事は私にとりましては又と得難い好機會です。では

元氣で行つて参ります。諸先生方にも何卒宜しく御鳳聲下さい。先は御禮旁々近況御報告まで。戦地から又御便り致します。

(六月十日) (倉澤教授宛)

暑き恵々加はり、水銀柱に既に百度を突破「ヤーク」と小車の軋る音を聞き、一入暑苦しさを増します。其の後長々の御無沙汰致し、誠に申謝あります。高梁繁茂期前の討伐、治安工作とつい事務多忙なりし爲不悪御海容下さい。先生にもお變りもなく御壮健にて御起居の事と遠察褒賀至極に存じます。降つて私も以て御蔭無事御奉公致し居ります故他事乍ら御赦念下さい。本年は藪價も近年稀なる高値にて、七十掛見當としか長年浮ばれたのでう。宣撫工作に出て當地附近にて見た來た支那の養蠶業の狀態を一すお知らせ致します。規模の小さい事、大概一軒一位位の二十八蛾付(至つて産卵不良のもの)一枚位のこと。家に入つて見ると桑葉があるので蠶が居るなと思つて採して見ると箱の上(衣服を入れる箱です)に濕布を施し、その上からぼんと箱をしてあるのが二枚か三枚、中には丸い一尺五寸余りのざるの様なもの、中で飼育して居るものもあります。非常な厚飼にて蠶の上る蠶が居ると云ふ狀態です。品種も大變、雜多で一枚の中に黃繭、白繭混合、姬蠶、縞蠶、龍角等種々なるものが混合して居ます。交雜種なんて見るにも見られず原蠶その儘です。蠶種等も全部自家製の様です。秋、部落に行くと時々入口にぶら下げてあるのを見受けましたから、上簇も簇を使用するでなく、まるつきりちり捨てる、その様な所に上簇させて居ます。勿論、こも拔ならぬか致しません。上簇させればその儘放置です。それでも支那は乾燥して居るので解舒は余り不良でもないのです。繭の處分はどうするものか良くわかりませんが、時々奥地で生絲を見受ける點より判斷するに座繰式に繰絲して居るのではないかと思ひます。兎に角至極効率的なものです。將來、當省に優秀な指導者が來てるとどん、指導改良すれば氣候など内地と大差なく、多冬季寒く()と云つて信州とは殆ど同じ位の様です。夏一寸暑い位のものですから相當有望なものだと思はれます。以上は極く狭い自分等の警備区域内で宣撫に出て時々見受けた極く一部を見て來て、自分の知れる範圍にてお知らせしたのですから、その點御承知置きの程願ひ上げます。年末筆校長先生始め諸先生方に宜敷御風聲下さい。向暮の折柄吳々も御健康に御注意あらん事を祈り上げます。

(六月十一日) (倉澤教授宛)

勤務先或は

住所不明者に就て

左記の各位宛の本時報は返送され、種々調査せらるゝ勤務先或は住所不明にて、時報送達上のみならず種々不便の點多し御存知の方は御一報願ひたし、尙轉任者は必ず其の旨御忘れなく勤務部へ。

勤務先	住所	出頭期日	學生氏名
山口 正紀(七回)	山口 善一(土回)	淺井 春雄(八回)	山口 正紀(七回)
坂路 善一(土回)	坂路 善一(土回)	高柳 春雄(八回)	坂路 善一(土回)
足立 勝彦(五回)	足立 勝彦(五回)	沈 九 如(七回)	足立 勝彦(五回)
遠藤 榮一(五回)	遠藤 榮一(五回)	徐 晉 鐘(六回)	遠藤 榮一(五回)
原 武一郎(六回)	原 武一郎(六回)	程 振 夏(七回)	原 武一郎(六回)
張 復 昇(六回)	張 復 昇(六回)	德永 忠祥(六回)	張 復 昇(六回)
加來 芳文(九回)	加來 芳文(九回)	田中 四郎(九回)	加來 芳文(九回)
林 龜一(九回)	林 龜一(九回)	小川 茂治(七回)	林 龜一(九回)
小松 正敏(五回)	小松 正敏(五回)	白井 一雄(六回)	小松 正敏(五回)
紡織科卒業	紡織科卒業	紡織科卒業	紡織科卒業
清水 巖(一回)	清水 巖(一回)	本吉 省(四回)	清水 巖(一回)
池田 誠(五回)	池田 誠(五回)	吉津 恒(五回)	池田 誠(五回)
尾和 博行(六回)	尾和 博行(六回)	大塚 浩(七回)	尾和 博行(六回)
下田 統夫(六回)	下田 統夫(六回)	鶴岡 要三(六回)	下田 統夫(六回)
舊教婦養成科	舊教婦養成科	舊教婦養成科	舊教婦養成科
高野 光枝	高野 光枝	高野 光枝	高野 光枝

昭和十四年度養蠶科二年生校外實習派遣地

派遣地	所在地	出頭期日	學生氏名
1. 岩手縣蠶業試驗場	岩手縣水澤町	七月廿三日	佐藤 彌
2. 農林省蠶絲試驗場福島支場	福島市腰の濱	七月九日	井上 貞二
3. 農林省蠶絲試驗場飯坂出張所	福島縣飯坂町	七月廿六日	門傳 東吉郎
4. 茨城縣蠶業試驗場	水戸松本町	七月十八日	尾崎 正己
5. 埼玉縣蠶業試驗場	熊谷市	七月廿三日	大井 卓雄
6. 千葉縣蠶業試驗場	千葉縣八日市場町	七月十五日	堀江 平三
7. 群馬縣蠶業試驗場	前橋市前代田	七月十七日	秋馬 正平
8. 山梨縣蠶業試驗場	山梨縣西山梨郡中津村	七月十七日	目崎 正夫
9. 長野縣蠶業試驗場	長野市岡田	七月二十日	松尾 卓見
10. 長野縣蠶業試驗場松本支場	松本市旭町	七月九日	竹村 英一
11. 農林省蠶絲試驗場松本支場	松本市四ツ谷	七月一日	金井 勸治
12. 長野縣蠶業試驗場池田支場	長野縣池田町	五月廿四日	清水 比呂夫
13. 愛知縣蠶業試驗場	愛知縣布袋町	七月十上旬	田中 義雄
14. 岐阜縣蠶業試驗場	岐阜市外那加村	七月十上旬	北村 義雄
15. 昭和産業株式會社	愛知縣春日井郡	七月十上旬	池田 逸郎
16. 三重縣蠶業試驗場	津市津興	七月十八日	今田 達夫
17. 關西製絲株式會社蠶種課	津市津興	七月九日	松田 得治
18. 龜山蠶種株式會社	三重縣龜山町	七月十上旬	外村 正三
19. 石川縣蠶業試驗場	金澤市西御影町	七月十四日	鈴木 吉高
20. 福井縣蠶業試驗場	福井縣吉田郡山内村	七月九日	山本 元一
21. 郡是製絲株式會社蠶事所	京都府綾部町	七月廿四日	東 正夫

昭和十四年度製絲科二年生校外實習派遣所

派遣所	所在地	出頭期日	學生氏名
1. 前橋市	前橋市	七月廿二日	梶田 清
2. 栃木縣小山市	栃木縣小山市	七月廿五日	清水 村
3. 新潟縣小出町	新潟縣小出町	七月十三日	大坪 健一
4. 石川縣津幡町	石川縣津幡町	七月十三日	阿武 孝康
5. 福島縣須賀川町	福島縣須賀川町	七月十五日	近藤 昌孝
6. 宮城縣仙台市	宮城縣仙台市	七月十五日	金 潤
7. 山形縣宮内町	山形縣宮内町	七月十五日	金 潤
8. 秋田縣寺内町	秋田縣寺内町	七月十五日	金 潤
9. 岩手縣岩手郡本宮村	岩手縣岩手郡本宮村	七月十五日	金 潤
10. 茨城縣土浦町	茨城縣土浦町	七月十五日	金 潤
11. 岐阜縣土岐市	岐阜縣土岐市	七月十五日	金 潤
12. 山形縣近江町	山形縣近江町	七月十五日	金 潤
13. 山形縣東置賜郡八代村	山形縣東置賜郡八代村	七月十五日	金 潤
14. 宮内町	宮内町	七月十五日	金 潤
15. 福島縣須賀川町	福島縣須賀川町	七月十五日	金 潤
16. 伊達郡長岡村	伊達郡長岡村	七月十五日	金 潤
17. 岩手縣一ノ関町	岩手縣一ノ関町	七月十五日	金 潤
18. 長野縣須賀町	長野縣須賀町	七月十五日	金 潤
19. 飯田市	飯田市	七月十五日	金 潤
20. 岡谷市	岡谷市	七月十五日	金 潤
21. 埼玉縣本庄町	埼玉縣本庄町	七月十五日	金 潤
22. 佐賀縣鳥栖町	佐賀縣鳥栖町	七月十五日	金 潤
23. 熊本市坪井町	熊本市坪井町	七月十五日	金 潤
24. 香川縣木田郡平井町	香川縣木田郡平井町	七月廿二日	梶田 清
25. 農林省蠶絲試驗場綾部支場	京都府綾部町	七月廿五日	清水 村
26. 徳島縣徳島市	徳島縣徳島市	七月十三日	大坪 健一
27. 岡山縣岡山市	岡山縣岡山市	七月十五日	阿武 孝康
28. 福岡縣福岡市	福岡縣福岡市	七月十五日	近藤 昌孝
29. 熊本縣熊本市	熊本縣熊本市	七月十五日	金 潤

編輯室より

昭和十四年度盛夏
千曲時報編輯部
小松忠一
山田良一
久保田一人
藤良一人
△大陸經營の一要素として七高工の新設
仰山すきたかとも知れない見逃しを乞ふ。

本紙發展に就て告ぐ
最近時勢の進展に伴ひ吾が蠶絲、纖維に關する學界、業界は多事多幸にして、吾が會員の蠶絲は益々華やかならんとし、研究、事業は益々華やかなるの舉りつゝあることは誠に欣幸に堪えない次第である。従つて本時報にも其等關係記事が追々増加しつゝあることは編輯部の喜び、且つ意を強ふる所であるが、更に、本紙の向上發展に鋭意努むる吾々は研究調査の發展並に吾千曲會機關紙たる本紙を飾る記事の益々多く會員各位が投稿されん事を切に願つて止まない。(編輯室)

寸法	期間	一月	六月	一年
1/4	頁	100	200	300
1/2	頁	200	400	600
1	頁	400	800	1200
1 1/4	頁	600	1200	1800
1 1/2	頁	800	1600	2400
2	頁	1200	2400	3600
2 1/4	頁	1600	3200	4800
2 1/2	頁	2000	4000	6000
3	頁	2400	4800	7200
3 1/4	頁	2800	5600	8400
3 1/2	頁	3200	6400	9600
4	頁	3600	7200	10800
4 1/4	頁	4000	8000	12000
4 1/2	頁	4400	8800	13200
5	頁	4800	9600	14400
5 1/4	頁	5200	10400	15600
5 1/2	頁	5600	11200	16800
6	頁	6000	12000	18000

優良蠶種案内
◎昭和十五年度春蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度秋蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號
×分月八號
×分月九號
×分月十號
×分月十一號
×分月十二號
◎昭和十四年度初夏蠶種
×分月一號
×分月二號
×分月三號
×分月四號
×分月五號
×分月六號
×分月七號